

新潟医療福祉大学言語発達支援センター活動報告—5年間の統計報告—

新潟医療福祉大学言語聴覚学科
吉岡豊, 山岸達弥, 渡辺時生, 石本豪

【背景・目的】

新潟医療福祉大学言語発達支援センター（以下、センター）が開設されて5年が経過した。近隣地域におけるセンターの認知度は年々高まり、最近では町役場のこども教育課や社会福祉協議会との連携が形成されている。開設当初のセンター活動状況については、吉岡ら¹⁾²⁾が報告している。本報告ではこの5年間にセンターを訪れた言葉に遅れのある子ども、あるいは言葉に悩みを有する成人例の特徴について検討した。

【方法】

対象は2010年4月～2015年3月までの5年間にセンターを利用した110例とした。この110例（男82例、女28例）を対象に主訴、初回評価時年齢、診断名を調査した。

【結果】

表1には初回評価時の主訴を挙げた。この表から、吃音に関する主訴が半数以上と最も多く、次に多いのは言葉の遅れであることがわかる。

表1. 初回評価時の主訴

	吃音	言葉の遅れ	発音	会話
人数	57	33	15	5

図1に初回評価時年齢の分布を示した。この図から、5、6歳の就学前と10歳以降にセンターを訪れる傾向にあることがわかる。なお、5、6歳児の場合は言葉や発音の問題が多く、10歳以降では吃音の問題が多かった。また、現在でも定期的に指導を行っているのは吃音15例、言葉の遅れ・発音では27例であった。

次に初回評価時に聴取した診断名について図2に示した。この図から、吃音が多いものの、その一方で医療機関を受診しておらず診断名のない例が最も多かった。

【考察】

センターでは吃音に対する需要が最も多いことが明らかとなった。吃音に関しては、渡辺ら³⁾が報告しており、今後もセンターの重要性が高まるものと思われる。

一方、言葉が遅れている子どもたちが来訪するのは5歳代が最も多く、より早期からの言語指導が必要と思われる。言語指導の開始が遅れる一因としては医療機関を受診し

ていない例の多いことが考えられる。今後は小児科を中心とする医療機関と連携をして早期から対応できる体制を構築していく必要があると思われる。

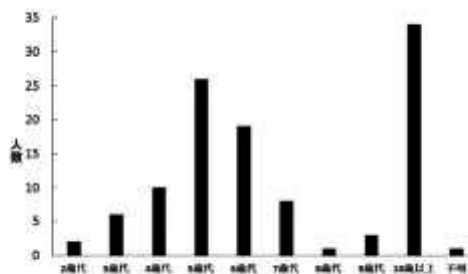


図1. 初回評価時の年齢分布

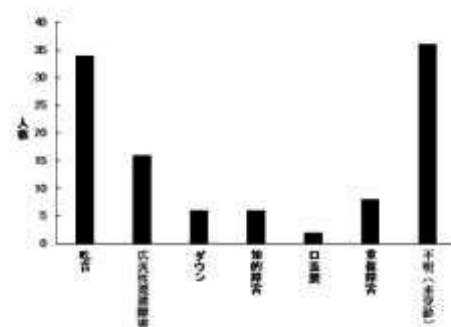


図2. 初回評価時に聴取した診断名

【結論】

新潟医療福祉大学言語発達支援センター利用児・者の分析を行い、吃音への対応、早期から言語指導を開始できる体制作りが必要であることが示された。

【文献】

- 1)吉岡豊, 糟谷政代, 山岸達弥ほか(2011)新潟医療福祉大学言語発達支援センターの活動報告. 新潟医療福祉学会誌, 11(1), 78.
- 2)吉岡豊, 山岸達弥, 渡辺時生ほか(2013)新潟医療福祉大学言語発達支援センターの概要と現状報告. 新潟医療福祉学会誌, 13(1), 19.
- 3)渡辺時生, 吉岡豊, 石本豪ほか(2014)新潟医療福祉大学言語発達支援センターにおける吃音支援の概要と現状報告. 新潟医療福祉学会誌, 14(1), 42.